

院内感染対策におけるリンクナースの 役割とその取り組み —活動目的の明確化と感染予防意識への効果—

吉村 彩¹⁾ 岩谷佳代子¹⁾ 田中 幸子¹⁾ 古賀 雪子¹⁾ 石橋富貴子²⁾³⁾
藤瀬日出美¹⁾ 杉原三千代¹⁾ 松竹 豊司²⁾ 内藤 慎二³⁾

IRYO Vol. 63 No. 10 (658-663) 2009

要 旨

嬉野医療センターでは院内の感染対策を統括、制御する目的で、院内感染対策委員会を頂点に、その実働部隊として院内感染対策チーム：Infection Control Team (ICT) と看護部感染対策担当委員会（リンクナース委員会）が設置されている。リンクナース委員会は各看護単位から選出された計11名の看護師により構成され、感染管理認定看護師を中心に活動している。当医療センターでは、ICTとリンクナース委員会2003年発足後、医療従事者を介した院内感染の発症はなく、疑わしき事例も早期の対応により終息し、重大事例への進展はない。リンクナースは、毎月院内感染対策マニュアルに準じたラウンドを行い、また定期的な改訂と遵守状況調査を行うことでマニュアルの徹底を図っており、そのような活動が院内感染発症防止に大きく貢献していると推察している。平成20年度は、これまでの活動に加え、リンクナースを手指衛生部門、感染防止技術部門、環境衛生部門にグループ化し、各部門の院内ラウンドにおける活動目的をより明確化することで、リンクナースの感染対策における意識・知識・実践能力のさらなる向上を目指した。今回、これらのグループ活動（手洗いの自己評価/針捨てボックスの適正使用調査/鋭利物取り扱い現状調査/集尿バッグ取り扱い時の標準予防策遵守状況調査等）を通じ、リンクナースのグループ化がもたらす感染予防意識への影響について検討した。これにより、各部門、各部署での感染防止に対する教育、啓蒙が図られ、適切な業務の改善が進められている。

キーワード 院内感染対策, リンクナース委員会, グループ化, 活動目的, 意識調査

はじめに

耐性菌の多様化と市中感染症の変遷にともない¹⁾, 院内の感染予防対策は、一層その重要性が増してき

ている。院内感染対策委員会は、各医療機関において感染症制御の中心として活動する最も重要な組織であるが、嬉野医療センターも院内の感染対策を統括、制御する目的で、院内感染対策委員会を頂点と

国立病院機構嬉野医療センター 1) 看護部, 2) 呼吸器科, 3) 教育研修部
別刷請求先: 内藤 慎二 国立病院機構嬉野医療センター 教育研修部 〒843-0393 佐賀県嬉野市嬉野町大字下宿丙2452
(平成21年4月20日受付, 平成21年9月11日受理)

Role and Practice of Link-nurse in the Control of Healthcare-associated Infection: Delineation of the Aim and its Effect
Aya Yoshimura¹⁾, Kayoko Iwaya¹⁾, Sachiko Tanaka¹⁾, Yukiko Koga¹⁾, Fukiko Ishibashi²⁾³⁾, Hidemi Fujise¹⁾, Michiyo Sugihara¹⁾, Toyoji Matsutake²⁾ and Shinji Naito³⁾, 1) Department of Nursing, 2) Department of Respiratory Medicine, 3) Department of Education & Research, NHO Ureshino Medical Center

Key Words: control of healthcare-associated infection, link-nurse committee, grouping, aim of activity, investigation of consciousness

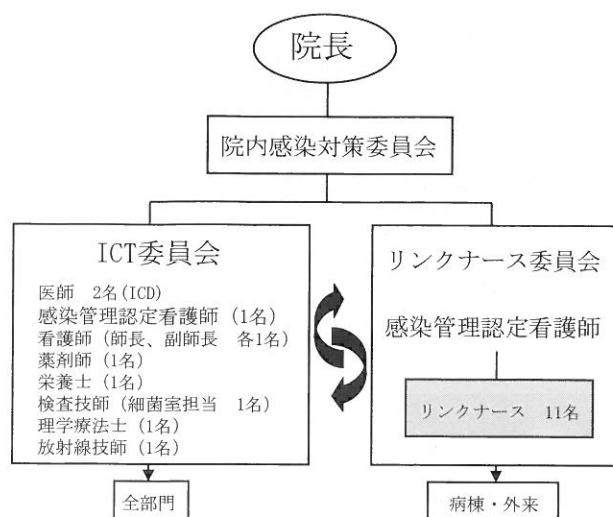


図 1

嬉野医療センター感染対策組織図：院長統括のもと院内感染対策委員会を頂点に、その実働部隊としてICT委員会とリンクナース委員会が設置されている。（リンクナース：病棟の感染管理を目的に各看護単位から選出された看護師）

し、その実働部隊として院内感染対策チーム：Infection Control Team (ICT) とリンクナース（→663pを参照）委員会を設置しており、リンクナース委員会は、各看護単位から選出された計11名の看護師と1名の感染管理認定看護師で構成され、院内感染対策の実践面においてきわめて重要な役割を果たしている（図1）。よって、ICTやリンクナース委員会の活動をより強化、活発化し、スタッフの感染症に対する意識向上を図ることは、現場での感染制御機能を高めるとともに、最大の感染予防効果が得られる方策の一つと考えられる。

今回、われわれは今までのリンクナース活動に加え、リンクナースを手指衛生部門、感染防止技術部門、環境衛生部門にグループ化し、各部門の活動目的をより明確化することで、リンクナース全体の感染対策における意識、知識、実践能力の向上を目指した。この試みにより各部門、各部署での感染防止に対する意識向上が図られ、適切な業務の改善が進められているので紹介する。

リンクナース委員会の活動内容と課題

当医療センターにおけるリンクナース委員会の主な活動内容は、①院内感染対策マニュアルの見直し、②リンクナースラウンド（手洗い状況チェック（図2A）/針捨てボックスの適正使用チェック（図2B）

/擦式手指消毒剤携帯の推奨（図2C）/感染管理認定看護師による教育講演・勉強会（図2D）/消毒薬の適正使用チェック/个人防护具使用状況チェック等）、③文献学習、④手洗い自己評価チェック分析、⑤看護助手への学習会、⑥感染対策における疑問点の意見交換、などである。習慣化されやすいこれらの活動を常に高い水準に維持し、またさらにそれを向上させていくためには、さまざまな工夫とアイデアが必要であるが、多忙をきわめる日常業務の中であってこれらすべてに細心の注意を払いながら実践していくことは理想的ではあるが、非常に困難であり、時に活動内容の多様性から感染症予防全般に対する意識が低下する可能性がある。

リンクナース3部門の活動内容

リンクナースの活動目的をより明確化し、意識の向上をはかることを目的に、院内感染対策においてとくに重要と思われるものから手指衛生²⁾、感染防止技術、環境衛生にスポットをあて、リンクナースを、①手指衛生部門、②感染防止技術部門、③環境衛生部門の3つのグループに分けた。それぞれの部門で院内ラウンドに用いる独自のチェックリストを作成し、そこから得られたデータを評価、分析し、その結果をリンクナース委員会で発表することで各病棟にフィードバックした³⁾。

手指衛生部門

1. 目的：手洗いの重要性を認識し、適切な手洗いが行えること。
2. 方法：グリッターバッグを用いた手洗いチェックをすべての病棟（9病棟）で、全看護師を対象に行った（回答看護師数：251名）。また、手洗いチェック前後で自己評価①②③を行い、その結果を分析した。ラウンドでは手指衛生の実際を観察するなど他者評価を実施した。

①他の患者の処置に移る前は必ず手を洗っている。
または擦式手指消毒剤を使用している。

②自分の洗い残しがある場所を認識して洗うことができる。

③手のひら・手の甲・指先・爪・指間・手首を適切に洗うことができる。

前記3項目について病棟全体と擦式手指消毒剤を携帯している病棟（○病棟）の結果を比較、分析し

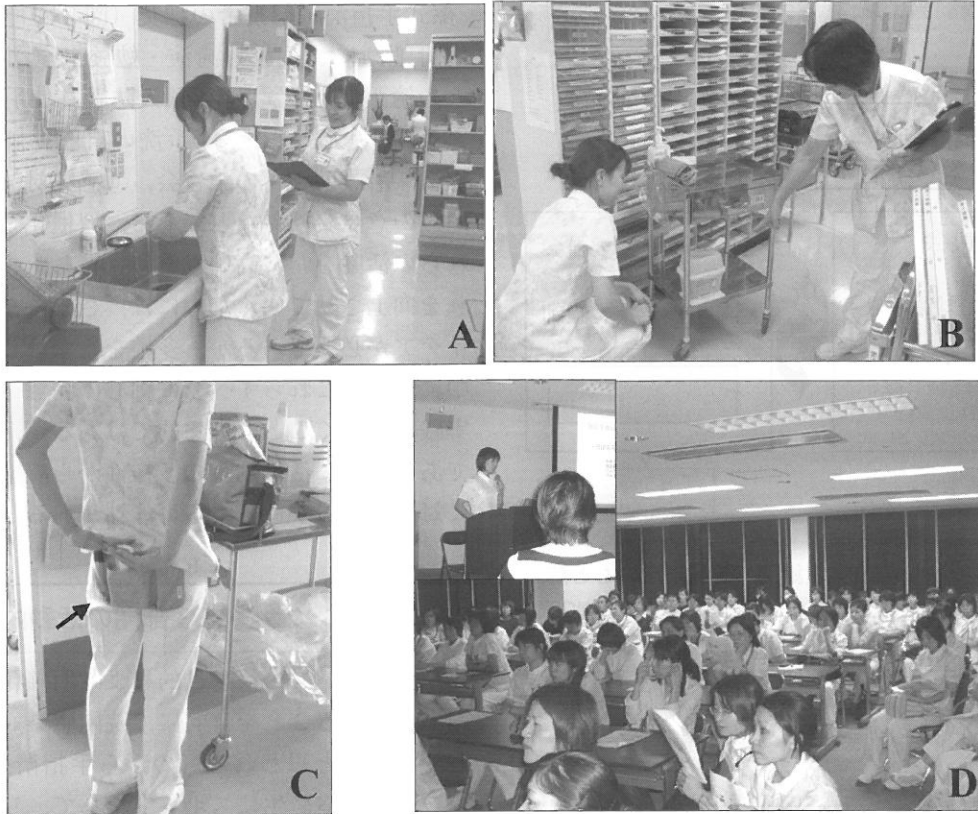


図2

- A リンクナースラウンド手洗い状況チェック：チェックリストを用いて手洗い状況を入念にチェックする。
- B リンクナースラウンド針捨てボックス適正使用チェック：針捨てボックスの置き場所や針の捨て方は適正かどうかをチェックする。
- C 擦式手指消毒剤：擦式手指消毒剤の常時携帯を開始した（矢印）
- D 感染管理認定看護師による教育講演：感染管理認定看護師による学習会や講演が定期的に行われ、スタッフの感染症に対する意識、知識の向上が図られている。

た。

による手洗いチェックは、年度早期から実施することが望ましいと考えられた。

3. 結果・考察（図3）

- 1) グリッターバグを用いた手洗いチェック後は、3項目とも自己評価点数は増加した。洗い残し箇所をグリッターバグにより再度確認することで、自分自身の手洗い方法の癖を知り、その改善につながると考えられた。
- 2) 全病棟平均との比較において、擦式手指消毒剤を携帯している病棟は、項目①の自己評価点数が高く、設備や動線にとらわれない擦式手指消毒剤の常備携帯は有用であると考えられた。また、この結果は「医療現場における手指衛生のためのガイドライン」の擦式消毒用アルコール製剤推奨理由にも通ずると思われた⁴⁾。
- 3) 新採用者が多い4月は、自己評価の点数が低い傾向にあり、ラウンドの時期やグリッターバグ

感染防止技術部門

1. 目的：標準予防策に基づいたカテーテル管理の中で手袋交換の必要性を認識すること。
- 方法：全病棟（9病棟）、全看護師を対象にカテーテル管理に関するアンケート調査（4項目18問）を、5カ月の間隔を設け2回行った（回答看護師数：1回目213名、2回目190名）。アンケート調査は、“はい”“いいえ”の二者択一で回答を求め、この中の手袋交換に関する設問で“膀胱留置カテーテル挿入中の患者に対し、集尿時に患者ごとの手袋交換ができていない”と回答したものに対し、6つの理由〔①もったいない、②必要ない、③業務にゆとりがない、④面倒、⑤時間的余裕がない、⑥その他（

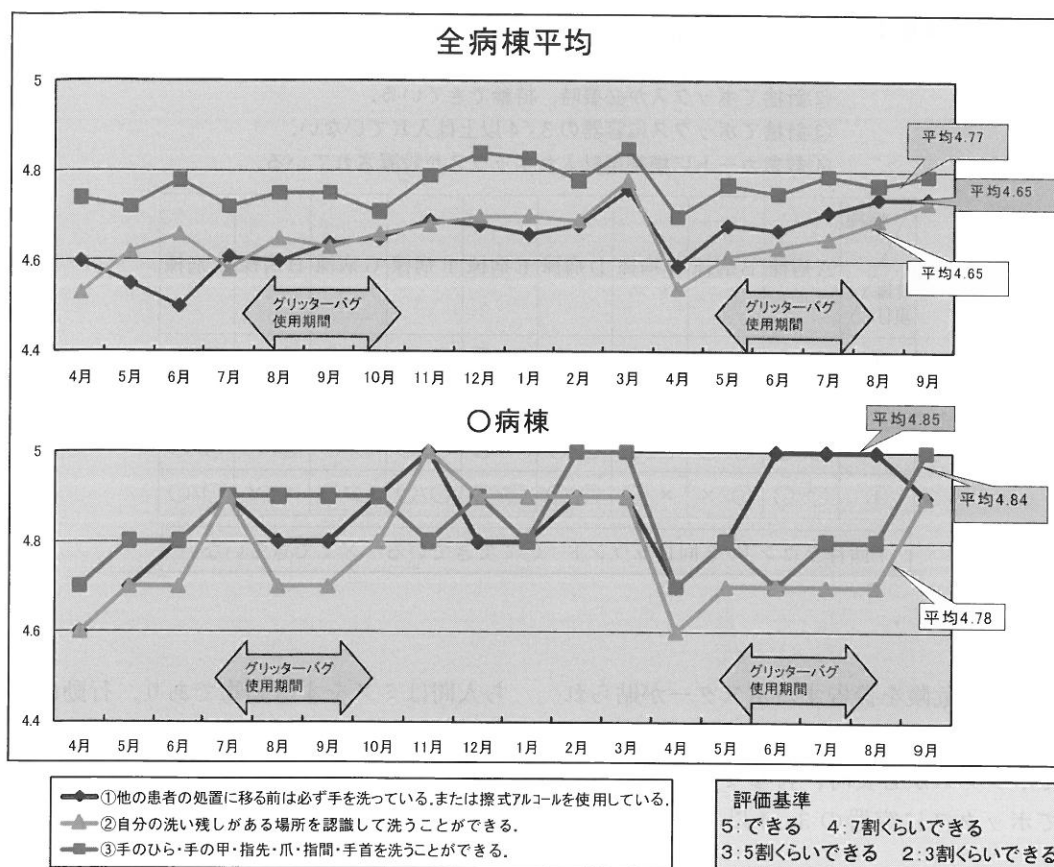


図3 手指衛生グループ：グリッターバッグを用いた手洗いチェック
：グリッターバッグを用いた手洗いチェック後は、3項目とも自己評価が改善している。

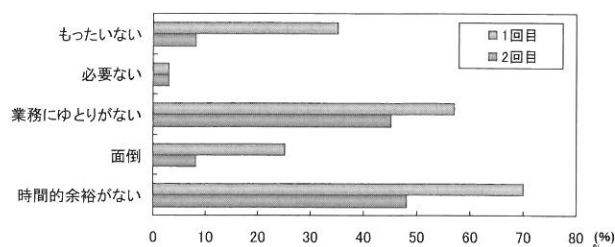


図4 感染防止技術グループ：集尿時に1患者1手袋交換ができない理由

：啓蒙活動後は、手袋交換が推進され、できない理由の回答が減少した。

)]を提示し、その中から複数回答可で回答を得た。1回目のアンケート調査後、全看護師へ手袋着用の必要性を記載した用紙を配布し、勉強会等による啓蒙を行い、5カ月後に同様のアンケート調査(2回目)を実施、手袋交換できていないと回答したものの理由とその意識の変化を分析した。

2. 結果・考察(図4)

1) 1回目の調査で患者ごとの手袋交換を「面倒」

や「もったいない」と回答したものが、啓蒙活動後の2回目の調査では大幅に減少した。

- 2) 患者ごとの手袋交換について「時間的余裕がない」と回答したものが最も多く、必要性を感じていても実施できていない現状が明らかになった。
- 3) 手袋交換を推進するためには、手袋の設置場所などを考慮した作業の動線を工夫する必要がある、また机上の啓蒙活動だけでなく、ラウンドを活かした現場での機会教育が重要と考えられた。

なお、⑥その他の回答者はいなかった。

環境衛生部門

1. 目的：針捨てボックスの適正な使用方法を理解すること。
2. 方法：全病棟、全看護師を対象に使用済みの携帯用針捨てボックスの適正使用状況と鋭利物取り扱い現状を下記の項目①～④についてラウンドにて他者評価を行い、5カ月後にその再評価を行った。

表1 環境衛生グループ：携帯用針捨てボックスの適正使用状況と鋭利物取り扱い現状

評価項目：①リキャップの危険を警告するポスターが貼られている。

②針捨てボックスが必要時、持参できている。

③針捨てボックスに容器の3/4以上は入れていない。

④救急カートに携帯用針入れボックスが設置されている。

病棟 評価 項目	A病棟	B病棟	C病棟	D病棟	E病棟	F病棟	G病棟	H病棟	I病棟
①	○/○	○/○	○/○	×/○	○/○	○/○	○/○	○/○	○/○
②	○/○	○/○	○/○	○/○	×/○	○/○	○/○	○/○	○/○
③	○/○	○/○	○/○	○/○	×/○	○/○	○/○	○/○	○/○
④	○/○	○/×	×/○	○/○	○/○	○/○	○/○	×/×	○/○
1回目ラウンド/2回目ラウンド ○：できている ×：できていない									

- ①リキャップの危険を警告するポスターが貼られている。
- ②針捨てボックスが必要時、持参できている。
- ③針捨てボックスに容器の3/4以上は入れていない。
- ④救急カートに携帯用針入れボックスが設置されている。

3. 結果・考察（表3）

- 1) 項目①-③において、1回目のラウンドの結果が2回目実施時には改善されていた。
- 2) 項目④において、「できる」から「できていない」となり、また「できていない」が「できていない」のままであった理由として、前者は2回目調査の際、ボックスの置かれていた場所が定められた設置場所と異なっていたために「できていない」と評価した。後者に関しては、回答した病棟では救急カートの使用頻度がきわめて低く、その必要性が十分には理解されておらず、意識も希薄なことから改善もできなかったと考えられた。
- 3) リキャップ防止や感染性廃棄物等の職業感染に関する対策意識が、習慣化された行為の中で低下している場合も多く、その改善にはラウンドにおける現場での他者評価が有効と考えられた。

F. H. ホーキンスは、人は100分の1の確率でエラーをおこし、どんなに環境を整備しても1,000分の1の確率で事故はおこると述べている⁵⁾。すなわ

ち人間はミスをする動物であり、行動における目的意識の低下は、さらにその頻度を高めるものと考えられる。今回われわれはリンクナースを手指衛生部門、感染防止技術部門、環境衛生部門の三つの部門にグループ化し、それぞれの活動目的をより明確化することで、分散しがちな意識を絞り、部門ごとの意識の向上を目指した。そして、その試みの中で抽出されたデータを分析し、リンクナース委員会で発表、病棟にフィードバックすることによって、自分の所属する部門の活動目的に対する意識向上に加え、他の部門の活動目的にも意識が及ぶようになり、さらにはリンクナース以外の看護師にもその意識改革が波及し、院内全体の意識向上にもつながった。

今回の試みによって、複雑、多様化する感染症予防対策に関して、その一部を分担化し集中的な意識付けを行うことは、そこで見いだされた問題を分析し、それを共有するという過程の中で、結果的に感染予防対策全般に対する意識の向上が図られると考えられた。

ま と め

リンクナースを手指衛生部門、感染防止技術部門、環境衛生部門にグループ化し、ラウンド上での活動目的を明確化することで、リンクナースの感染対策に対する意識・知識・実践能力の向上を目指した。感染予防活動を維持、充実させるためには、その目的と方法を明確にし、現場の意識・実践能力を定期的かつ的確に把握、評価、改善していくことが重要

であると考える。

(なお、本論文の内容は、第62回 国立病院総合医学学会にて発表した。)

[文献]

- 1) 二木芳人. 市中肺炎の変遷と診療に求められる対応 特集: 市中肺炎治療とガイドライン. 最新医学 2008; 63: 367-70.
- 2) 藤田 烈. 6章 手洗いの「いま」を知る実践を支えるエビデンス集 1 CDC ガイドラインから読み解く手指衛生の考え方. In: 洪愛子編. 現場を変える! 徹底させる! 手指衛生パーフェクトガイド. 大阪, MC メディカ出版, 2008: p224-39.
- 3) 崎浜智子, 森兼啓太編. 感染対策のためのサーベ

イランス強力サポートブック STEP. 4 フィードバック インфекションコントロール2008年春季増刊 大阪, MC メディカ出版, 2008.

- 4) Boyce JM, Pittet D. Guideline for Hand Hygiene in Health-Care Settings: Recommendations of the Healthcare Infection Control Practices Advisory Committee and the HICPA/SHER/APIC/IDSA Hand Hygiene Task Force. Infect Control Hosp Epidemiol. 2002; 23: S 3-40.
- 5) Frank H. Hawkins. Human Factors in Flight. Gower Technical Press, Brookfield, Vt., USA. 1987. (翻訳: ヒューマン・ファクター-航空の分野を中心として-黒田勲監修, 石川好美監訳, 東京, 成山堂書店 1992.)

今月の

用語

隣に伝えたい 新たな言葉と概念

【リンクナース】

英 link nurse

「リンクナース」は、院内感染管理対策システムとしてイギリスでつくられた役割であり、感染制御チーム ICT (Infection Control Team) と現場とのつなぎ役の看護師として配置されている。その看護師たちは経験豊富な現場の看護師であり、「リンクナース」として任命することによって、情報の交換の要となり、ICT を補助して効果的な感染対策 (予防, 特定, 制圧) を遂行するという役割を担っているのである。

わが国でも厚生労働省「院内感染対策マニュアル作成の手引き」の中で、「院内感染対策の組織, 権限, 業務」の中に「管理システムの構築」として次のように書かれている。

各部署において、業務を行いながら感染管理者あるいは ICT (Infection Control Team) と協力をして感染対策や情報の収集を行う看護師 (リンクナース) を配置する方がよい。

ところで、最近では感染管理以外の分野でも専門チームの活動を推進するための役割を担う者として「リンクナース」を配置する病院もみられるようになった。たとえば、栄養サポートチーム、褥瘡対策チームやリスクマネジメント委員会などである。それら専門チームの下部組織として現場での活動を遂行し、その成果を期待できる役割としての「リンクナース」の配置は、現在ではチーム医療・チーム活動の有効なシステムになっている。

〈関連団体〉日本感染管理学会, 日本がん看護学会

(国立病院機構名古屋医療センター 特命副院長・看護部長 南 美知子) 本誌659p に記載